

会長挨拶

第8回日本補完代替医療学会 学術集会を開始するに当たって

第8回日本補完代替医療学会学術集会

会長 多田 富雄



このたび第8回日本補完代替医療学会の世話人を引き受けるに当たって、一言ご挨拶を申し上げます。

私は右半身麻痺に加えて言語障害が重なり、自分でご挨拶をすることもままなりません。もう第一線を退いた身です。それにもかかわらず、大事な学会の会長を引き受けたのは、この学会事務局のある金沢で、脳梗塞で倒れ死線をさまよったとき、学会の皆さんに一方ならぬお世話を蒙ったこと、またそれを通して、代替医療の現代的役割について考える機会を与えられたからです。

代替医療の中には、私の専門とする免疫機構がかかわっているものが多くあります。食品の3次機能にも免疫が深くかかわっていることは、今消化管の免疫の研究がひとつのエポックを呈していることから明らかです。アレルギーやがん免疫など、ホットな分野での代替医療の重要性も指摘されています。

私は、今までの基礎的な研究で得られた知識を、この新しい潮流に反映させることが必要と思い、協力することに決心しました。

とはいえ障害者である私は実際には動けませんが、幸い東邦大学前教授でアレルギー学会理事長の富岡玖夫先生と、順天堂大学の免疫学教授、奥村康先生が、副会長として私の代わりに運営や企画に当たってくれますので、安心してお引き受けしました。

私は長い間免疫学の研究と、国際免疫学会の会長をしてきた立場から、代替医療のあるべき姿について、何か提言できればと思っています。今回の特別講演やシンポジウムには、免疫、アレルギーの最新の話題が盛り込まれています。また一人の病者として、私自身が求めている代替医療の問題も含まれています。いつも尊敬してきた五木寛之さんにも特別講演をご快諾頂きました。

私はこの学術集会のひとつのテーマとして、“Evidence-based CAM から Narrative-oriented CAM へ”という主題を選びました。驚いたことに Narrative-based Medicine のことは、昨年の本学会の会長の金沢大学井上正樹教授の挨拶にもすでに触れられていることが、昨年の抄録集を読み直して分かりました。井上教授は Evidence-based Medicine と Narrative-based Medicine は、もともと医療の両極端にある dichotomy であるが、互いに補完、調和させることが必要と説いています。それこそ時代を先取りした卓見ですが、私はもう一足踏み込んで代替医療のおかれた現実に提言したかったのです。

まず西洋医学の理念である Evidence-based medicine という風潮が行き過ぎて、単なる検査数値だけを重視する医療に陥り、それが全体を重視するはずの代替医療にも広がって、個々の患者の愁訴や病態の把握に対応していない状態になっているからです。代替医療も科学であるからには、Evidence

が重要であることはいうまでもありません。しかし、真の **Evidence** とは、単なる数値だけではない。遺伝的多様性や、環境の差によって起こる個別性や反応性の違いにも留意しなければならない。漢方でいう「証」まで含めた、客観的、かつ全体的な 検証が必要なのです。それをどのようにして読み取るかについて、もっとディスカッションが必要なのです。もともと個体の全体を大切に生まれて、患者に暖かい医療のはずです。補完代替医療の原点に戻る問題提起です。

Narrative とは、もともと物語性のこと、医師は一人ひとりの患者の愁訴を正しく聞き、それを医学の言葉に正しく翻訳することに始まります。医療を人間の営みへの関与という文脈で考え、患者一人ひとりの個別性を重視しつつも、普遍的な法則を見出す努力を惜しまないというのが、もともと代替医療のあるべき姿だと思います。皆様のご検討を期待します。

このような観点から、特別公演やシンポジウムには、異分野の専門家にも参加してもらっています。こうした領域を超えた検討こそ代替医療という学問の特徴であり、今では数少ないそれが可能な学会の特権だと思います。充実した楽しい学会を期待しています。どうか皆様のご協力をお願いします。

2005 年 10 月